

小美玉市の歴史を知ろう 80

小川の繭市場―昭和初期の小川の象徴―

現在、店舗や金融機関が立ち並ぶ小川・横町地区。昭和初期、かつてここには繭市場がありました。一時は繭の取引状況がNHKの経済市況で放送され、全国の繭市場の相場を左右する市場、といわれた時もあるほどの賑わいを見せていました。

繭市場・開設前後

繭市場開設以前から、小川町（当時）では養蚕が盛んに行われていました。繭は40日前後で出荷でき、出荷後すぐに現金収入が得られたため、農家の有力な生業でした。

繭は農家から仲買人（商人）へ売却され、製糸業者が買い取る取引は夜間に行われていました。横町・大町・中田宿といった地区では、繭の買い取りのため、岡谷（長野県）の製糸業者がたびたび出張に訪れていたといいます。ときには、仲買人に安く買い取られたこともありました。

大正時代に入り、夜間の繭取引の禁止や養蚕家の組合成立などが進んだことにより、繭は仲買人の売買から

養蚕組合の競争入札による販売に推移していききました。

大正14年（1925）、横町に繭取引を行う「小川繭糸市場（繭市場）」が開設されました。江戸時代の豪商の屋敷跡に建てられ、大規模な鉄骨づくりの建物だったといわれています。

創業期の繭市場は営業が不安定な時期もありましたが、次第に業績も好転していきます。繭の取引は近隣だけでなく、県内各地の養蚕組合と行われ、入札には県外の製糸業者も来場するようになりました。最盛期には繭市場の取引期間中、周辺の商店、食堂、旅館、金融機関は混雑をきわめたと伝えられています。昭和7年（1932）、繭市場での優良養蚕組合の表彰式と役員慰安会の写真には、会場内に万国旗がはためき、大勢の繭市場関係者の熱気に包まれる様子が見え隠れしています。

「懇親の場」としての繭市場

小川の繭市場にはもう一つの顔がありました。昭和14年（1939）1月、



小川繭糸市場優良特定養蚕組合表彰式・役員慰安会写真（個人蔵）

繭市場に百里原海軍航空隊員300人余りが招待され、2日間にわたって食事が催されたそうです。同月には、町の国防婦人会主催による出征軍人家族慰安会も開催されています。慰安会には家族や軍人をはじめ、繭市場社長や当時の町長も招待され、食事の振る舞いや余興の手踊りも加わって、大変な盛会となったそうです。繭取引の場と軍人・民間人の懇親の場という、二つの顔をもった繭市場。昭和初期、白銀のきらめきで満ちていた町の背後には、ひたひたと戦争

の足音が迫っていました。繭市場では昭和17年（1942）頃まで取引が続けられていましたが、やがて戦争の波にもまれ、姿を消していくこととなるのです。

（生涯学習課 和久 法子）



小川繭糸市場 印影



繭市場内部写真（小川資料館蔵）